

平成27年度教育事業

## 伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村

参加した大学生は、最初の2日間でリーダーシップや子どもへの接し方、集団作りの技法を学び、竹細工といった伝承文化について学びました。後半の日程では、小学生が参加する「子どもむかし生活体験村」の企画と運営を担当しました。4日間、小学生とともに過ごす中で、リーダーとしての資質を身につけ、活動を通して伝承文化を小学生に伝えました。

### 1. 事業実施までの経緯

本事業は当所でのこれまでの体験活動が自然体験活動中心であったことや、日本では自然と生活文化が一体化していると思われること、日本の伝承文化を理解し、それを継承していこうとする意識が希薄化していること等から、自然と文化の融合体験、及びそれをとおして地域に根ざして活動するリーダーを養成することを目的として、平成19年度より国立大学法人愛媛大学との共催事業として実施している。また、平成25年度から法人ボランティア養成事業として実施している。

9年目となる今年度も、参加する大学生の意識を高めるために愛媛大学と連携して、前年度末より打合せを重ね事業内容を早期から決定し、大学への広報に力を注いだ。また、実施3週間前に当所の担当者、愛媛大学の担当者を講師に、大学生対象の参加者講習会を実施した。

小学生の参加対象は、昨年度に引き続き4～6年生とした。小学生の広報の範囲は愛媛県中予・南予地区全域とし、幅広い地域からの参加者を募った。これは、子どもたちが初めて出会う友人と、普段あまりできない異年齢集団での生活、遊びを経験してもらいたいと考えたためである。参加者の応募動機からは、まだ見ぬ新しい友人に期待を高めながら申し込む様子がうかがい知れた。

内容については、過去「わら」「伊予竹」「泉貨紙」等の素材をテーマに事業を展開してきたが、今年度については、伝承文化としての「伊予竹」「古民家」を素材に、昨年度の課題を踏まえ、「リーダーの養成」を重点テーマとして事業を展開した。リーダーの養成について、具体的には個々のプログラムの「ねらい」を焦点化し、それに照らした「ふりかえり」を充実させることに留意した。その際、製作方法や安全上の留意点、舞台となる土居家に関する知識等を、講師や惣川地区の方々から大学生が学び、小学生に伝えることとした。

また、日程については昨年度に引き続き、大学生も小学生も学んだことを十分にふりかえることができるよう5泊6日の事業とした。

以上の点を考慮しつつ、関係機関と連携しながら、今年度の事業を進めた。

### 2. ね ら い

地域を大切にし、地域に根ざして活動するリーダーが求められている中で、愛媛の伝承文化を学び、先人の知恵と自然体験の融合した体験活動をすることで、地域を大切にしようとする心を育むとともに、「子どもむかし生活体験村」を自ら計画し、運営することで、地域に根ざして活動しようとするリーダーを養成する。

3. 主 催 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立大洲青少年交流の家  
国立大学法人 愛媛大学

4. 後 援 [後援] 愛媛県教育委員会 西予市教育委員会 大洲市教育委員会  
NHK松山放送局 あいテレビ 愛媛新聞社  
[協力] 西予市野村町惣川「土居家」

5. 期 日 平成27年8月24日(月)～29日(土)  
 ※参加者講習会を7月30日(木)に実施  
 ※子どもむかし生活体験村は8月26日(水)～29日(土)
6. 場 所 国立大洲青少年交流の家 24日(月)～25日(火)、28日(金)～29日(土)  
 西予市野村町惣川「土居家」 26日(水)～28日(金)  
 ※当初の予定では25日(火)も「土居家」で活動する予定であったが、台風の接近により25日も交流の家での活動とした。
7. 参加人数 大学生16名 (募集人数15名)  
 [子どもむかし生活体験村 小学校4～6年生20名(募集人数20名)]
8. 講 師  
 岩本 康孝 氏 (大洲市立喜多小学校教諭)  
 宮本 春樹 氏 (宇和島市立和霊小学校教諭)  
 犬伏 武彦 氏 (元松山東雲短期大学特任教授)  
 西予市野村町惣川地区の方々  
 山崎 哲司 氏 (愛媛大学教育学部教授)  
 日野 克博 氏 (愛媛大学教育学部准教授)  
 国立大洲青少年交流の家 職員

【大学生向けチラシ】

『伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村』  
 2015年8月24日(月)～29日(土)  
 ※5泊6日

【小学生向けチラシ】

『子どもむかし生活体験村』  
 2015年8月26日(水)～29日(土)  
 ※3泊4日

平成27年度 国立大洲青少年交流の家 教育事業 体験の風をおこそう

# 伊予の伝承文化を学び伝えるリーダー村

コンzept

一泊の2日一 伝承文化の学び遊び、子どもたちの関わり方、交流体験を「遊び」、プログラムを企画します。

一泊の4日一 農体験(土居家)を機に、小学生20人と共同生活する「子どもむかし生活体験村」を開催し、学んだことを「土居」、実践します。

リーダーとしての 関与・能力が 身につきます。

手を伸ばせ！そして自分を伸ばせ！

8月24日(月)～29日(土)

講師の方々(予定)

参加者講習会：7月30日(木)16:30 愛媛大学にて実施

対象：大学生(15名) ※参加費は体験参加費に入っています。

場 所：国立大洲青少年交流の家  
 西予市野村町惣川「土居家」

参加費：0,000円(食事代・シーツ洗濯代等)(予定)

〒799-0001 愛媛県大洲市北只1086  
 国立大洲青少年交流の家 リーダー村係(担当：栗田、森分)  
 TEL:0893-24-5176 FAX:0893-24-2909  
<http://www.niss.ac.jp>

【申込方法】氏名(ふりがな)・性別・23年8月31日現在郵便番号・住所・電話番号・2次名・希望する伊予大滞泊の希望を記入して「郵送」または「FAX」でお申し込みください。【申込締切】平成27年7月21日(火)

※愛媛大学では、「現代社会の問題」(共通教育科目、履修条件あり)の2単位に、教育学部生については「地域連携実習」2単位とすることもできます。  
 ※参加者は、全国の国立青少年教育施設でボランティア活動を行うことができる「法人ボランティア」に登録することができます。

平成27年度 国立大洲青少年交流の家 教育事業 体験の風をおこそう

# 子どもむかし生活体験村

国産の食料で食卓を囲んでいただきます。

いよいよお盆の季節、お年玉と一緒に福を呼びこみましょう！  
 大洲市野村町惣川地区の子どもむかし生活体験村へ来ていただき、こんなことをするの初めてではないですか？

体験の風をおこそう

8月26日(水)～29日(土)

対象 小学生4～6年生(20名)

場所 西予市野村町惣川「土居家」

参加費 5,700円(食事代・雑費等)(予定)

協力 国立大洲青少年交流の家 西予市野村町惣川地区の皆さん

〒799-0001 愛媛県大洲市北只1086  
 TEL:0893-24-5176 FAX:0893-24-2909  
<http://www.niss.ac.jp/>

※申込締切 平成27年7月8日(水)必着

※参加費は別途で決定します。

※お盆を越えた場合は、お盆前まで申し込みおられるのを優先させていただきます。

※申し込み状況については、電話でご確認ください。

※本事業は、大学生や新しい友達と4日間を過ごす事業です。児童や生徒が宿舎滞泊での参加はできません。ご了解の上でお申し込みください。

※国立大洲青少年交流の家までの送りと受け付けが必要です。日程は変動を覚悟ください。

## 9. 日 程

7/30 (木)	16:30											18:30	
	参加者講習会 (愛媛大学)												
8/24 (月)	9:30	10:30	12:00	13:00	15:30	16:30	17:30	19:30	20:30	21:00	22:00		
	受付	開講式	アイス ブレイク	昼食	(演習・実習) 竹の遊び道具・うちわ づくり実習と安全管理	(講義) 現代の 教育	(講義) 子どもとの かかわり方	夕食・ 入浴	(講義) リーダー について	(演習) 役割分担	情報交 換会	就寝	
8/25 (火)	9:00	10:30	12:30	13:30	17:30	19:30	22:00						
	(演習) 土居家と 惣川地区	(講義・演習) 土居家のつくりと 歴史的意義について	昼食	(実習) 竹食器作り	(演習) 村の掟作り、リーダーズ プログラム立案	夕食・ 入浴	(演習) プログラム計画・運営準備、 法人ボランティア登録				就寝		
8/26 (水)	8:30	10:30	12:00	13:00	14:30	17:30	19:30	21:00	22:00				
	(バス移動) 惣川へ 開村準備	開 村 式	仲間 づくり ゲーム	昼食	(講義・演習) 愛媛の民俗文化 について	(活動Ⅰ) 竹食器・竹箸づくり 竹の遊び道具づくり	夕食・ 入浴	(活動Ⅱ) 班活動 目標づくり	打合せ 企画会	就寝			
8/27 (木)	9:00	12:00	13:00	18:00			20:00	21:00	22:00				
	(活動Ⅲ) うちわづくり	昼食	(活動Ⅳ) リーダーズプログラム①	夕食・ 入浴	(活動Ⅴ) リーダーズ プログラム②	打合せ 企画会	就寝						
8/28 (金)	9:00	12:00	13:00	15:00	15:15	17:00	17:30	19:30	20:30	22:00			
	(活動Ⅵ) うどんづくり	昼食	土居家清掃、 片付け	土居家 退家式	(バス移動) 交流の家へ	入 所	夕食・ 入浴	思い出発表 準備	ふりかえり	就寝			
8/29 (土)	9:00	10:00	11:00	12:00									
	思い出 発表準備	閉村式 思い出発表	ふりかえり 閉講式	大学生解散									

※太字は台風の影響により計画を変更した部分

## 10. 活動内容

〈開講前【7月30日(木)】愛媛大学

「参加者講習会」(16:30~18:00)

講師：国立大学法人愛媛大学 山崎哲司氏 日野克博氏、国立大洲青少年交流の家 職員

本事業に応募した大学生を対象とした参加者講習会を愛媛大学にて開催した。事業に応募した16名の学生は愛媛大学11名(教育学部7名・医学部医学科1名・医学部看護学科3名)と、松山東雲女子大学5名(人文科学部心理子ども学科)であった。

講習会では、はじめに前年度の参加者が学生の立場から感想も含め、事業の様子について紹介があり、続いて交流の家職員が、本事業の概要やねらい、青少年教育施設における活動内容について紹介した。また、参加者には法人ボランティア登録制度についても説明を行った。本事業では、事業前半の講義・演習等が法人ボランティア登録に必要な共通カリキュラムも兼ねていることから、参加者講習会を用いて説明することとした。最後に、共催の愛媛大学から講師を務めていただく山崎哲司氏が参加者に対し、激励と望ましい参加態度についての講話を行った。

## 〈第1日【8月24日（月）】国立大洲青少年交流の家

「アイスブレイク」（10：30～12：00）

講師：国立大洲青少年交流の家 職員

参加した大学生の交流と、26日から始まる「子どもむかし生活体験村」で最初に行われる「仲間づくりゲーム」での指導方法習得のため、大学生に対してグループワークゲームを実施した。ゲームが進むに従って大学生の表情が和み、お互いにコミュニケーションを深めていく様子が確認できた。それぞれのゲームの後には職員によりゲームの目的や実施上の注意などが紹介された。体験の「ふりかえり」と「わかちあい」が行われ、体験学習法がどのようなものか大学生は理解した。



「竹の食器・竹の遊び道具、うちわづくり指導法、安全管理講習」（13：00～15：30）

講師：国立大洲青少年交流の家 職員

大学生は小学生の竹細工を指導する立場となるため、具体的な工作方法だけでなく安全管理の手法についても学んだ。最初に職員から指導を受けながらうちわを製作した後、グループに分かれてKYT（危険予知トレーニング）を行い、トレーニングシートを使って野外活動の場面においてどのような危険が潜むか意見交換を行い、リスクマネジメントの手法について学んだ。子供は考えずに行動する傾向が高いため、事故を未然に防ぐ心構えとして「用具の確認」「周囲を見渡す」「活動場所の片付け」の3点について意識の共有を図った。後半は竹の食器作りを体験し、工具の扱い方や怪我を防ぐための注意点などを逐次確認しながら実地で習得した。



「現代の教育」（15：30～16：30）

講師：国立大学法人愛媛大学 山崎哲司氏

近年、社会環境の変化（少子化、団塊の世代の大量退職など）により大学における教育手法も変化しつつある状況が紹介され、アクティブラーニング（能動的学習）とはどのようなものか講義が展開された。次に学習者が既に持っている知識を元に問題を解決する手法について例題が示され、大学生は配付された動物のイラストを元に自分の予想を立て、ペアワークによって答えを絞り込んでいく課程で、協同学習とはどのようなものか理解を深めた。次に、これまでの大学教育で重視されてきた「学士力」と経済産業省が打ち出した「社会人基礎力」の違いについて説明があった。大学生はリーダー村を通して自分たちがどのような能力を身につけていくのか理解し、今後の講義に向けて気持ちを新たにしたいようであった。



「子どもとのかかわり方について」（16：30～17：30）

講師：大洲市立喜多小学校 岩本康孝氏

この企画に参加する大学生は大半が教職志望であるが、小学生に接する機会は決して多いとは言えない。そのため現役の小学校教員である岩本氏から、集団作りの手法や留意点に加え、子供への接し方について講義が行われた。



導入において、まずは参加者各自が「小学生の頃 思い出に残っていることベスト3」について考え、課外活動がいかにか長く子供に影響を及ぼすのか理解した。教育力を持つ集団を形成する為には戦略性が不可欠で、「この時点までにこの状態まで子供達を成長させる」といった具体的なイメージとしてのゴールを設定し、その為集団としてのルールを確立する必要性が説かれた。

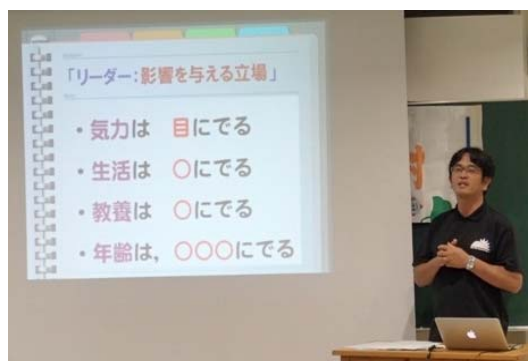
後半では、子供に接する際に必要な「リフレーミング」の手法が紹介され、学生達は演習を通して理解を深めた。学生達は今後、担当する生活班ごとにルールを設定し、様々な場面で小学生を指導するようになるが、講義が終わる頃には幾分か心の準備ができつつあるよう見えた。

### 「リーダーについて」（19：30～20：30）

講師：国立大学法人愛媛大学 日野克博氏

「リーダー」と「リーダーシップ」、これらの言葉は日常生活において何気なく使われているが、両者の違いは容易に説明できない人が多いと思われる。役割としての「リーダー」と、行動としての「リーダーシップ」を理解する上で、様々な角度から考察する形で講義が行われた。

最初にリーダーに関するイメージマップを作成したが、ほとんどの学生は記入にあぐねており、この段階では大学生の理解はさほど進んでいないようであった。続いてリーダーとしての立ち振る舞い、求められる機能とはどのようなものであるか紹介され、後半部分ではほめ方、叱り方、観察の仕方について具体的な例を提示しながら講義が進められた。講義の最後には、講師の日野氏から本事業を通して「自分なりのリーダー像」をイメージすることと、自分なりの「名言」を作り出すことが課題として出された。大学生達は今後の活動を通して、自分なりのリーダー像を模索していくこととなった。



## 〈第2日【8月25日（火）】国立大洲青少年交流の家

「土居家と惣川地区」（9：00～10：30）

講師：国立大洲青少年交流の家 職員

当初の計画では午前中に土居家のある西予市惣川へ移動する予定であったが、台風が当日午後に関東地方に最接近する進路をとっていたため、交流の家での活動に変更した。惣川で行う予定であった「現地地下見」に代えて、昨年度の記録写真や映像資料等を用いたプレゼンテーションを大学生に行った。

### 「土居家のつくりと歴史的意義について」（10：30～12：30）

講師：犬伏武彦氏

講師の犬伏氏は、土居家復興の中心となって活動された方である。土居家は四国最大級の茅葺き古民家として知られているが、犬伏氏はその文化的価値を惣川地区の住民に再認識させる運動を展開された。その活動が実を結び、平成10年に現在の形に復元されている。講義では復興前の土居家の姿や復元作業の様子を、当時の思い出とともに紹介いただいた。大学生は手元のレジュメも活用しながら、土居家の文化的価値を再認識した。大学生がこの講義を受講することは、事業の後半で土居家に宿泊する小学生の生活指導を担当する上で、欠かせない過程となっている。



### 「竹食器作り」「村の掟作り」(13:30~17:30)

前日の作業で完結していなかった竹食器作りを行った。竹食器は、その作り方を大学生が小学生に指導することになっている。大学生は前日に教わったKYTに基づき、安全管理上の注意を確認しながらクラフト室での作業を進めた。

後半は場所を移し、子どもむかし生活体験村における「村の掟」の作成にとりかかった。前日の岩本氏による講義で学んだ「教育力のある集団づくり」に不可欠なルールの特徴を反映させながら、意見をまとめた。進行はほぼ大学生が中心となって行い、夕食前には小学生に開村式で示す5つの掟が完成した。

### 「リーダーズプログラム立案」(19:30~22:00)

この事業では、小学生を迎えた翌日を中心に、大学生が考案したプログラムが実施される。時間と場所が設定されているだけで、その中身は大学生が考案することになっている。今回、大学生は小学生の生活班ごとの担当以外に、企画運営の役割も分担している。全員でプログラムの内容について意見を出し合い、それぞれの企画担当が司会と進行を行う形で意見をまとめ、具体的な役割分担や準備物を決定していった。これまでに学んだKYTや小学生への接し方、リーダーとしての役割が、この場面で生かされつつあることを確認できる話し合いとなった。



## 〈第3日【8月26日(水)】西予市野村町惣川『土居家』

### 「『子どもむかし生活体験村』開村準備」(8:30~10:30)

本来であれば前日に小学生の受け入れ準備をする予定であったが、小学生が到着する1時間前に土居家に到着したため、慌ただしい開村準備となった。時間の無い中で、大学生はそれぞれの役割分担に応じて、開村式の準備や仲間づくりゲームのリハーサルを行った。

### 「子どもむかし生活体験村」開始(10:30~)

### 「仲間づくりゲーム」(11:00~12:00)

今回参加する小学生は全員異なる小学校に通っており、まったく新しい人間関係での生活となることから、緊張感を解きほぐすための仲間づくりゲームは不可欠である。大学生は、初日に体験したグループワークゲームの中から小学生が取り組みやすいものを選び、彼らなりのアレンジを加えながら小学生を楽しませた。ゲームが終わる頃には参加者の間に自然な笑顔が増え、この活動を境に小学生・大学生とも会話を楽しむ様子が見られた。



### 「愛媛の民俗文化について」（13:00～14:30）

講師：宇和島市立和霊小学校 宮本春樹氏

宮本氏は、小学校で教鞭を取る傍ら、県内の古民家について研究をされており、土居家のある惣川地区でも以前から実地調査を行われている。この講義は小学生参加者が取り組みやすいよう、土居家とその周辺のフィールドワークを中心に進められた。参加者はワークシートを手に、土居家の作りやその材料、惣川地区の暮らしがどう変化したのかなど、実際に目や耳で確認しながら学んだ。



### 「竹食器・竹箸づくり、竹の遊び道具作り」（14:30～17:30）

講師：惣川地区の方々

地元惣川地区の方々に御指導いただき、竹を使った遊び道具や食器づくりを行った。幅広い年齢層が同じ場所で作業に取り組む姿は、日常の生活では見られなくなった光景ともいえる。大学生は、交流の家での演習で学んだ道具の扱い方や安全管理の方法を確認しながら、小学生の作業を手助けした。今回は参加者全員が竹食器（器と箸）を、班ごとに竹馬を制作した。早く作業が終わった小学生の中には、自主的に水鉄砲や竹ぼっくり作りに挑戦する者もいた。さらに、この活動の後も空き時間を見つけては竹細工に没頭する小学生が多く、創作意欲をかき立てる活動となった。また、できあがった竹馬に乗ろうとする小学生を大学生が指導する光景も、土居家で過ごす中で頻繁に見られた。



### 「班活動・目標づくり」（19:30～21:00）

子どもむかし生活体験村には「村の掟」があり、開村式で紹介されて、朝のつどいや食事の前など、生活の節目で復唱するようになっている。これとは別に、班ごとの活動目標を定めるのがこの時間である。大学生は、初日の岩本氏の講義で学んだ良好な集団づくりに不可欠なゴールの設定を意識し、班ごとの目標を設定しようと努めた。とはいえ、小学生から意見を引き出しながら目標を定める作業は一筋縄ではいかず、大学生はリーダーとしての役割を再認識させられたようであった。

## 〈第4日【8月27日（木）】西予市野村町惣川『土居家』、三島神社周辺

### 「うちわづくり」（9:00～12:00）

小学生が各自でオリジナルのうちわを製作した。ここでも大学生の役割分担に基づき、全体の説明が行われたあと、各班での作業へと移行した。終始、小学生と同じ目線を意識し、寄り添うようにして指導する大学生の姿に、リーダーとしての成長を確認できた。うちわのデザインは絵柄が中心であったが、生活班のメンバーの名前を記入する小学生も多く、仲間意識の高まりを感じた。できあがったうちわを互いに自慢しあった後は、土居家の上がり口に並んで記念撮影を行った。



### 「リーダーズプログラム①」(13:00~18:00)

惣川地区は谷間にできた集落であり、土居家はその高台にある。午後からの大学生による企画は、谷筋にある三島神社の周辺を使って行われた。土居家から三島神社までおよそ2キロの道のりを、大学生が引率する形で、少し秋めいた惣川の景色を楽しみながら徒歩で移動した。途中、急な傾斜道や苔むした滑りやすい道などがあったが、誘導担当の大学生が事前に下見をしており、小学生に注意喚起しながら無事に移動することができた。

三島神社の境内に到着した後は、小学生が昔ながらの遊びを体験した。これは、大学生が事前に計画しておいた昔遊びである。担当の大学生が活動をリードし、道具を使わず、みんなでふれ合いながら出来る遊びを楽しんだ。また、サプライズ企画としてスイカ割りも準備されていたが、ここでも大学生がスイカを割る順番やルールを自分たちで決定し、小学生に不公平感を抱かせないように配慮をしながら活動した。



スイカを食して小休止した後、神社の横を流れる川での水遊びとなった。台風の影響で川は普段より増水しており、前日までは実施が危ぶまれる状況であった。ライフジャケットの着用とスローバックの準備、大学生が川岸に立ち小学生を急流に踏み込ませないなどの安全対策を施して実施した。沢の水はととても冷たく、長時間の活動とはならなかったが、自作した水鉄砲の出来を試す者、大学生と水を掛け合ってはしゃぐ者、石の裏をひっくり返して沢ガニを捕らえる者など、思い思いの時間を楽しんだ。

### 「リーダーズプログラム②」(20:00~21:00)

昔の暮らしでは、夜をどのように過ごしていたのかを体験してもらうため、「提灯ハイク」を実施した。提灯には和蝋燭を使用し、心許ない明かりを頼りに「夜の散歩」を行った。参加者は月明かりに照らされた夜の惣川を、雰囲気を楽しみながら歩いた。

実施に際しては、散歩のルートを大まかに設定し、ルートから外れる恐れのある分かれ道には大学生が立って見守るなど、大学生が役割分担をして安全管理に努めた。出発前には、交流の家職員による天体観測が催され、標高の高い惣川から見える満天の星空を楽しんだ。



### 〈第5日【8月28日(金)】〉

西予市野村町惣川『土居家』、野村少年自然の家、国立大洲青少年交流の家

### 「うどん作り」(9:00~12:00)

講師：惣川地区の方々

惣川での最後のプログラムは、惣川地区の方々と一緒に作る「うどんづくり」である。野村少年自然の家に移動し、各班で打った生地を製麺機でのぼし、大鍋で湯がく作業を参加者で協力して行った。これまでの活動の中で最も力が必要な作業であり、小学生だけで





は難しい場面も多かったが、大学生は手伝いを最小限にして小学生に体験させる姿勢を守っていた。うどんが茹で上がるまでの間、広場をつかった昔遊びや虫取りなど、参加者は活発に交流していた。間もなく共同生活が終わってしまう寂しさを、互いに紛らわしているようにも見えた。

できあがったうどんは各班ともかなりの量があったが、自分たちで作ったうどんの味は格別であり、全ての班が完食した。

### 「土居家清掃・片付け・退家式」(13:00~15:00)

2泊3日お世話になった土居家を全員で掃除し、搬入した物品の片付けを行った。竹細工で生じた箒では取れないゴミは手で拾い、庭に生えている雑草も取り除くなど、小学生も特に指示を受けずとも進んで清掃活動に取り組んでいた。土居家に対する愛着が強くなった様子を感じるとともに、子ども達に自主性が育っていることが確認できた。

最後に、これまで食事やうどん作りなど、さまざまな活動でお世話になった食堂の方々にお礼を述べ、土居家を後にした。



### 「思い出発表準備①」(19:30~20:30)

講師：国立大洲青少年交流の家 職員

土居家で過ごした3日間を班ごとにふりかえった。翌日に控えた思い出発表に向けて、それぞれの活動を紹介する担当を決め、発表する小学生の指導を大学生が行った。発表内容が思うようにまとまらない班も見受けられたが、大学生は終始、粘り強く小学生から感想を引き出すように努めていた。後半は各所で発表のリハーサル風景が見られたが、思うように準備が進まず目に涙を浮かべる小学生もいた。班を担当していた大学生による適切なかわりによって、その小学生も発表原稿を完成させ、終了間際に班のメンバーとのリハーサルを行うことができた。



### 「ふりかえり」(21:00~22:00)

講師：国立大学法人愛媛大学 山崎哲司氏 日野克博氏

初日の講義を担当した山崎氏と日野氏の指導により、これまでの活動の「ふりかえり」を行った。山崎氏からは社会人基礎力の観点でのふりかえりが行われた。「前に踏み出す力」「考え抜く力」「チームで働く力」がどのように変化したか、大学生は小学生とのかかわり方を思い返しなが自己評価を行った。日野氏からは「リーダー観」がどのように変化したのか学生への問いかけが行われ、初日の講義で作成したリーダーに関するイメージマップに再度記入を行った。どの大学生も記入する内容が大幅に増え、リーダーに対する理解が深まっている様子が見えた。最後に、大学生一人一人がこれまでの感想と自分が考えるリーダー像、そしてリーダーに関する格言を発表して「わかちあい」を行った。

## 〈第6日【8月29日(土)】〉国立大洲青少年交流の家

### 「思い出発表準備②」(9:00~10:00)

前日に準備した原稿を手し、最後のリハーサルを行った。思い出発表は小学生の保護者も参加するとあって、前日の和やかな雰囲気とは打って変わって真剣な表情でどの班も本番に臨んだ。

## 「思い出発表会」(10:00~10:30)

最初は4日ぶりに会う家族を前に、小学生は少し緊張した面持ちであった。小学生が土居家に到着して最初に行った「なかまづくりゲーム」から始まり、最終日の「うどんづくり」まで、それぞれの場面が映ったスクリーンを前に、みな堂々と発表を行った。会場の後ろでそっと見守っていた大学生も、発表が無事終わり緊張から安堵の表情へと変わった。

発表が終わった後、小学生から大学生にお礼の歌が披露され、それぞれに感謝の手紙が手渡された。思いがけないプレゼントに大学生は驚いたが、すぐに会場全体を巻き込んだ感動へと変わった。ついに迎えた別れに、参加者はもちろん保護者も涙にむせび、思い出発表会は終わった。



## 「閉村式」(10:30~11:00)

思い出発表会の後、閉村式を行った。最初に「村の掟」を参加者全員で唱和した後、村長として佐藤所長があいさつを行った。佐藤所長はあいさつの中で、「自信をもつこと」「感謝の心を忘れずに」の2点を参加した小学生への期待として述べた。最後に参加小学生を代表して、6年生男子児童が、4日間の活動を振り返り、かかわった全ての人たちへの感謝と、今後の活躍を誓うあいさつをして、子どもむかし生活体験村の全日程を終了した。



## 「子どもむかし生活体験村」終了

### 「ふりかえり」「閉講式」(11:00~12:00)

講師：国立大洲青少年交流の家 職員

大学生一人一人が、6日間の感想を順番に述べる形で事業のふりかえりを行った。感情が昂ぶり声を詰まらせる大学生が多かったが、共に過ごした仲間の言葉をみな真剣に聞き入っていた。これまでの子供観が変わった者、教職を目指しながらも迷いがあったが決意が固まった者、同じ6日間を過ごしながらも得たものはそれぞれであった。今回参加した大学生は1回生から院生と例年に比べ幅広く、学部も教育学部や医学部など、普段交流のない学生と協力しながらの活動となったので、お互いに多くの刺激を得られたようである。



参加者の一人は「保育士志望の仲間が育てた小学生を私が教え、何かあったら医療に携わる仲間に頼れる。これほど心強く感じることはない。」と語った。

## 11. 参加者の声

### 参加者の事後アンケートの結果

#### 【小学生】

\*満足：85.0%    \*やや満足：15.0%    \*やや不満：0.0%    \*不満：0.0%

- いろいろな体験ができてうれしかった。
- 夏休みに一番いい思い出ができた。
- 友だちと仲良くできることで、自分に自信を持つようになった。

#### 【大学生】

\*満足：100.0%    \*やや満足：0.0%    \*やや不満：0.0%    \*不満：0.0%

- 子供達とともに成長し、子供達の成長を間近で見守ることができて良かった。
- 自分たちが考える時間や、子供達とかかわる時間を持つことで、普段できないような体験や学びがありました。
- リーダーとして自身がどうすべきか先に指導していただいたおかげで、とても勉強になりました。

## 12. 成果と課題

### 【成果1】参加した大学生が自身で成長を感じられたこと

今年度も事業テーマとして「リーダーの養成」を挙げた。大学生は参加当初に抱いていたぼんやりとしたリーダーのイメージを、事業の最後には自分なりのリーダー像に昇華させたと言える。最初の2日間で、さまざまな講師からリーダーとしての資質や立ち振る舞い、役割について与えられた知識が、後半の4日間での体験活動を通して、リーダーシップとして身についたようである。リーダーシップを客観的に測る指標はないが、事業の前後で「社会人基礎力」の測定を行っており、事業の前後でほとんどの項目での上昇が確認できた。特に「前に踏み出す力」に分類される①～③の分野、および「考え抜く力」に分類される④～⑥の上昇が顕著であった。

今回、大学生の役割分担をする上で優先したのは、全員がリーダーシップを発揮する場面を確保するという点である。様々な学部や年齢の参加者には、子どもへの指導力という点では能力も経験も開きがあった。しかし、敢えて役割を均等に割り振ることによって、参加者はそれぞれのレベルに応じた学びを得たようである。

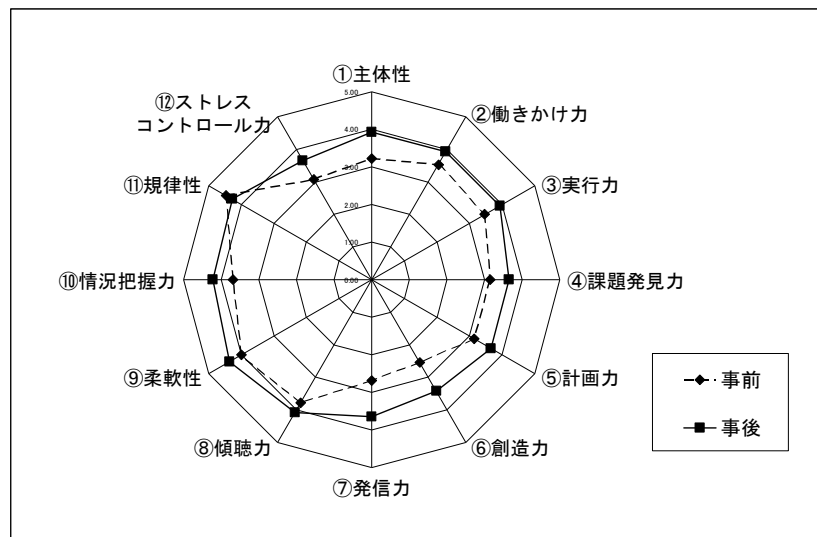


図1 社会人基礎力の変化

### 【成果2】ゆとりのある活動日程

昨年度は参加者の移動を少なくし、少しゆとりは生じたが、まだ自由な時間が少ないという反省があった。今回は竹細工の内容を精選するなどし、参加者が自由に工作するゆとりが生まれた。また、役割分担が明確になり、打合せがスムーズに進んだこともあり、大学生と小学生がプログラム以外で自由に交流する時間が多く確保できていた。今後も活動を詰め込み過ぎず、「7割の計画」で柔軟性とゆとりを持たせた計画としたい。

### 【成果3】IKR（生きる力）評定用紙（簡易版） 事前事後の比較

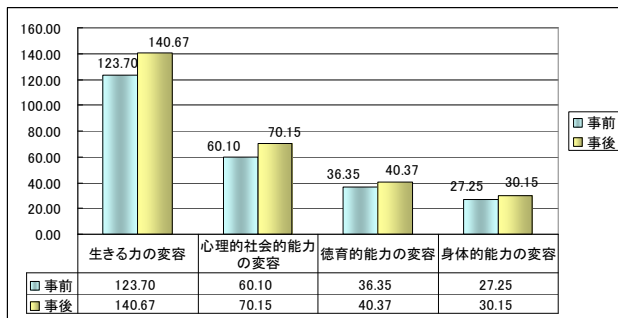


図2 IKR評価用紙（小学生）評価結果

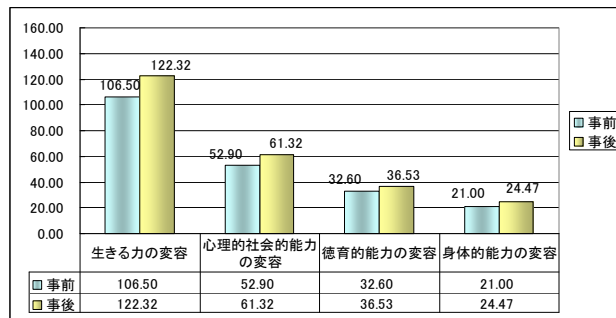


図3 IKR評価用紙（保護者）評価結果

本事業での体験が、小学生にどのような変化をもたらせたのかを調査するために、「IKR（生きる力）評定用紙（簡易版）」を実施している。さらに今年度は、昨年度の課題を受けて小学生の保護者に対しても調査を実施した。グラフのとおり、全ての項目において、事業前に比べ、事業後にその数値が向上しており、その変化は小学生自身の評価もその保護者も大きく変わらない。プログラムが具体的にどのように子供達への変容をもたらしたのかは明らかにできないが、小学生自身が成長を自覚し、保護者も感じ取ることができるような変化を及ぼしたとは言える。ただ、気になるのは小学生の自己評価よりも保護者の評価が総じて低い点である。調査で明らかにしたい点とは異なるが、次年度に向けてこのデータをどのように扱うのか検討をしたい。

#### 【課題1】大学生の「ふりかえり」「わかちあい」の質を高めること

本事業では期間中、毎晩翌日の計画確認とともに、それぞれが一日の活動について感想と課題を述べる時間が設定されている。自分の体験を言語化し、それを聴き合うことで学びはある。しかし、評価や課題設定の仕方は大学生それぞれに任されている。より客観的な評価で、新たな気づきが得られるように、ふりかえり用のシート作成やミーティングの進行方法など、来年度に向けて工夫に努めたい。

#### 【課題2】リーダーとしての活躍の場を保証すること

昨年度も課題として上がっていたが、本事業で法人ボランティアの資格を取得しても、その後の事業に参加する大学生は少ない。今年度は大学生16名のうち、12月時点で3名がボランティアとして交流の家主催事業に参加しているが、未だに低調と言わざるを得ない。本事業のねらいである「地域に根ざしたリーダー」の育成を目指し、事業後も大学生が法人ボランティアとして、その後の事業で活動するような流れを工夫するとともに、連携している愛媛大学の地域連携実習の制度なども活用しながら、継続的な活動の方法を探っていききたい。

#### 【課題3】節目を迎えるにあたっての取り組み

本事業は、平成19年度から継続して実施し、今年度で9回目となる。本事業は講師の方々の熱心なご指導や西予市野村町惣川地区のみなさんの協力、国立大学法人愛媛大学等関係機関との連携があって継続できている。これまで伝承文化の題材やプログラムや期間の変更を繰り返しながら続き、来年度で10年の節目を迎える。この機会にこれまでの歩みをふり振り返り、本事業にかかわって来られた方々から思いや意見を頂戴したいと考えている。また、本事業は次年度より当交流の家の「地域力向上事業」として位置づけられる計画である。これまで協力いただいた方々に感謝しながらその関係をさらに深め、地域の教育資源をさらに生かした形で事業を実施できるよう努力を重ねていきたい。

（担当：企画指導専門職 来田 淳）